

花の雨

加古宗也句集

Kako Soya

角川平成俳句叢書 06

角川書店

加古宗也主宰句集「花の雨」出版記念祝賀会

幽玄にして繊細な旋律

「花の雨」を唄う男声合唱団

石崎 白泉

朝までの雨も上がった二月二十八日、加古主宰の第三句集「花の雨」の出版記念祝賀会が盛大に開かれた。名古屋マリオットアソシアホテル十六階のホールは、参加者で溢れた。和服姿も多く、華やいだ雰囲気の中、正午にスタート。

渡辺たけし同人の開宴の言葉の後、来賓の神奈川大名譽教授・復本一郎氏と作家・村上護氏の祝辞をいただいた。

続いて舞台はがらりと変わり、緋毛氈を踏んで高座に上がったのは落語家・柳亭市馬師匠である。柳家小さんの高弟で、落語界きっての美声の持ち主で、当日披露した相撲の呼出しも見事であった。最近の話題で囁きに入り、俳句も題材にして聴衆の笑いを誘ったのは流石だった。

次に「春野」副主宰・ながさく清江氏の乾杯の音頭で会食に。会食の間に、主宰の親しい友人である来賓の皆さんのスピーチがあり、明るく自由な雰囲気ですべて進んだ。

スピーチと食事がほぼ終わったところで、祝賀会の目玉企画

である男声合唱団グランフォニックのコンサートが始まる。この合唱団は名古屋を中心に活躍しており、「歌を通じて生きる喜びを感じ、伝える」を理念としている。祝賀会には指揮者を含め四十五名の団員が出演した。今回のコンサートのハイライトは、「花鳥風詠」の曲である。この曲は、句集「花の雨」から「花の雨熱きものいま身辺りに」へ鳩くくとくくと八坂の夕桜へ夕風や水口に置く余り苗」などの四句を選び、指揮者・向川原慎一氏が作曲したオリジナル曲である。加古主宰の骨太な温かみのある句を、幽玄にして繊細な旋律で仕上げられている。主宰の主張する「生きている証」が歌を通じて「確かな感動」として伝わってくる大合唱であった。

加古主宰は、金子あきゑ同人からお祝いの花束を受けた後、お礼の言葉と今後の決意を語った。花鳥風詠の曲に感激したこと、この会を盛り上げた暖かい人びとの繋がりを大事にすること、いまの感動を心の糧にしてゆきたいと心づめて語られた。我々「若竹」一門にとっては心強い限りである。

その後、若竹編集長田口風子同人のお開きのあいさつがあり、盛況裡に終了した。司会は服部くらはら、池田あや美両同人が担当した。

早い機会に、第四句集が上梓されることを期待しながら散会した。

◆ プログラム

1. La Serenata(セレナータ)

作詩 G.A.チェザレオ
作曲 トステイ
編曲 向川原 慎一

2. 俳句「花鳥風月」

(1) 花の雨

(2) 鳩くくと

(3) 夕風や

(4) 桐櫓(きりぼた)の

作句 加古 宗也
作曲 向川原 慎一

3. 花

作詞 武島 羽衣
作曲 滝 廉太郎
編曲 なりたまさと

指揮 向川原 慎一
ピアノ 早瀬 洋子
朗読 永井 一美